

森 遺 跡 VI

- 95-3・96-4-1, 2, 3 調査区の概要 -

河内磐船駅北土地区画整理事業に伴う発掘調査

1997. 3

交野市教育委員会

はしがき

平成7年度から実施してきました河内磐船駅北区画整理事業に伴う森北1丁目地内の発掘調査も平成8年度をもちまして、調査の予定をほぼ終了いたしました。

今回の調査地は、これまでの森南地区から少し下ったJ.R学研都市線の北側地域で、天野川流域の沖積平野部と接するところです。この調査地域は古代から稻作に適した地であるとともに、天野川水系を利用して大和地域にいたる交通の要衝地であったと推定されており、以前から遺跡の存在が確認されていたところです。

今回の発掘調査におきましても、これまでの調査結果と同様に、交野市の古代史を解明する上における数多くの成果を納めることができました。これらの調査結果につきましては、これまでの成果を一部含めたかたちで「森遺跡V」、「森遺跡VI」の2冊の報告書にてまとめここに刊行いたしました。ご高覧ご活用いただければ幸いと存じます。

最後となりましたがこれまでの調査に際しまして御協力を賜わりました地元の方々をはじめ関係諸氏の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、今後とも交野市文化財行政の推進により一層のご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

交野市教育委員会

教育長 永井秀忠

例　　言

1. 本書は、交野市教育委員会が河内磐船駅北土地区画整理組合の依頼を受けた、交野市都市計画事業河内磐船駅北特定土地区画整理事業に伴う文化財調査として、平成7年度より2カ年にわたる調査の内、平成7年10月17日より平成8年3月29日までの間実施した森遺跡1995-3調査区及び、平成8年7月26日から平成8年12月25日までの間実施した森遺跡1996-4-1.-2.-3調査区における発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、交野市教育委員会が財団法人交野市文化財事業団に委託をして実施したものである。
3. 現地調査及び遺物整理・実測については、下記の方々に参加・協力をいただいた。
荒木幸治・荒田恵・伊藤栄二・井上主税・浦奈緒美・笠原利恵子・熊西洋子・阪下麻子・鈴木小夜子・田村佳代・寺田祥子・永井良典・中西貞子・南郷安恵・林純子・伴裕志・星野美絵・松下恵子・松本真紀・宮野裕美子・宮本飛鳥・和田佳子

凡　　例

1. 本書で使用する色調は、『新版標準土色帳』1995年度版（農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修）による。
2. 遺跡の位置は、国土座標第IV座標系に基づいて表示しており、北は座標北を示す。標高はT.P.からのプラス値で示している。
3. 土器類の断面には、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器・陶磁器は白抜き、須恵器は黒塗りで表示している。
4. 遺構名の紛らわしさを解消するため部分的に遺構の略号として、Pを柱穴として使用している。

目 次

I 調査の目的と経過	1
II 調査の方法	2
III 95-3・96-4-1調査区の基本層序	3
IV 95-3調査区の遺構と遺物	5
V 96-4-1調査区の遺構と遺物	8
VI 96-4-2・3調査区の基本層序	10
VII 96-4-2調査区の遺構と遺物	11
VIII 96-4-3調査区の遺構と遺物	13
IX まとめ	19

図 目 次

図1 森遺跡とその周辺	1	図12 中世～近現代遺構面	11
図2 調査地区	2	図13 古墳時代遺構面	12
図3 95-3, 96-4-1 調査区基本層序	4	図14 中世遺構面	13
図4 出土遺物	5	図15 河川内出土遺物	14
図5 上坑	6	図16 井戸平面及び断面図	14
図6 中世遺構面2	6	図17 ピット群平面及び断面図	15
図7 古墳時代遺構面	6	図18 建物1・2・3	16
図8 出土遺物	7	図19 周溝平面及び断面図	17
図9 弥生時代末～古墳時代遺構面	8	図20 出土遺物	17
図10 出土遺物	9	図21 出土石器	18
図11 96-4-2・3 調査区基本層序	10	図22 古墳時代全体図	20

写真目次

写真1 95-3調査区全景	口絵	写真13 出土遺物	7
写真2 96-4-1調査区全景	口絵	写真14 河川1	9
写真3 調査区全景（西から）	口絵	写真15 河川2	9
写真4 95-3調査区西側断面	4	写真16 泞濫原	9
写真5 96-4-1調査区東側断面	4	写真17 遺物出土状況	9
写真6 水田状遺構検出状況	5	写真18 出土遺物	9
写真7 鋤溝検出状況	5	写真19 中世～近現代遺構検出	11
写真8 河川（東から）	7	写真20 井戸検出状況	14
写真9 河川（北から）	7	写真21 井戸完掘状況	14
写真10 泞濫原	7	写真22 馬の歯	15
写真11 泞濫原土坑検出状況	7	写真23 集石遺構	15
写真12 遺物出土状況	7	写真24 建物1・2・3	16



写真1 95-3調査区全景



写真2 96-4-1調査区全景



写真3 調査区全景（西から）

I 調査の目的と経過

森遺跡は、交野山系の一つ、竜王山の西に延びる尾根より分岐した尾根の先端、台地部分に拓けた遺跡で、古くから耕作地表面に遺物の散布がみられ、弥生時代の遺物を出土する遺跡として、名が知られていた。近年、大阪のベッドタウンとして開発が進み、それに伴って行う緊急発掘調査も広範囲に行われるようになった。昭和61年から行った河内磐船駅東西線道路予定地の発掘調査では、弥生時代後期から中・近世に至るまでの遺構・遺物を多量に検出し、当地域が大規模な複合遺跡であることが判明した。中でも平成3年度に行った市道森南13号線予定地では、古墳時代前期の堅穴式住居3棟を検出、豊富な遺構・遺物の検出によって当時の様相を知る貴重な手がかりを得た。特に古墳時代中・後期における鍛冶関連遺構は、これらの調査によって初めて得た情報であり、森遺跡のみならず大阪府下、さらには周辺地域とのつながりを探る上で重要な資料を提供した。

一方、JR学研都市線北側地域は、岩船小学校南遺跡として小学校建設時に出土した弥生時代中期の石器の存在が知られていたが、遺跡の詳細については不明のままであった。平成4年度に行った区画整理事業に先立つ発掘調査で、古墳時代前期から後期にかけての建物群（竪穴式住居2棟・掘立柱建物11棟・井戸3基等）を検出した。これらは古墳時代中期後半以降、鍛冶操業を行った工人集落に該当すると考えており、森遺跡の範囲が更に広範にわたることが判明した。今回の調査は、区画整理事業に伴うもので、平成4年度の調査地に近いことからその調査結果と同タイプの遺構を検出する可能性があるため、平成7年度4調査区、平成8年度3調査区の調査を行うこととなった。平成7年度1～3調査区の調査結果については『交野市埋蔵文化財調査報告1996-II』を刊行し、各調査区の説明を行っている。第4調査区は、JR学研都市線と市立岩船小学校にはさまれた水田部分（2号公園建設予定地）で、総面積2,200m²のうち南側部分1,449m²を発掘調査対象とし、平成7年10月17日から着手し翌年3月29日に終了した。成果の公表として現地説明会を行った。平成8年度は、第2号公園建設予定地の残り北側部分及び区画道路7号部分の総面積1,826m²について調査を行った。その結果、公園部分からは弥生時代末～中世にかけての自然河川の跡を、道路部分からは古墳時代中期及び中世の集落跡を検出した。



図1 森遺跡とその周辺

II 調査の方法

調査は、機械掘削と人力掘削の併用で行った。各調査区とも基本的に同様の調査方法であり、あらかじめ調査区内にトレントを設定し、大まかに層序ならびに深さを測定したのちに本調査を行った。95-3調査区では、幅1m強の南北方向に縦断するトレントを、96年度の調査区では広範囲にわたるため、15カ所に1m四方のトレントを設けた。本調査では、まず機械で表土及びその下遺構上面遺物包含層10cmを含むまでの土を除去した。その後人力によって掘削及び精査し、上層遺構面を検出した。試掘調査において更に下層遺構の存在を確認していたので、まず上層遺構を記録保存するため、遺構の平面及び断面実測図の作成と写真撮影を行った。その後下層の遺構面を検出するため、再び人力によって掘削及び精査し、遺構を検出した。この遺構面において航空写真測量を行い、1/100の縮尺で平面図を作成した。そしてすべての遺構を掘りあげた段階で改めて2段5連の足場による写真撮影を行い、また平面及び断面実測図の作成を行った。

平成7年度における地区割りは、JR河内磐船駅北側、駅前広場建設予定地を95-2-1、-2調査区に、都市計画道路3、5、10私部東線建設予定地を95-2-3調査区に、第2号公園建設予定地南側部分を95-3調査区としている。平成8年度は残る第2号公園北側部分を96-4-1調査区に、区画道路7号の内、水路5号で分けられた東側を96-4-2調査区に、西側を96-4-3調査区に設定した。地区割りは図2のとおりである。

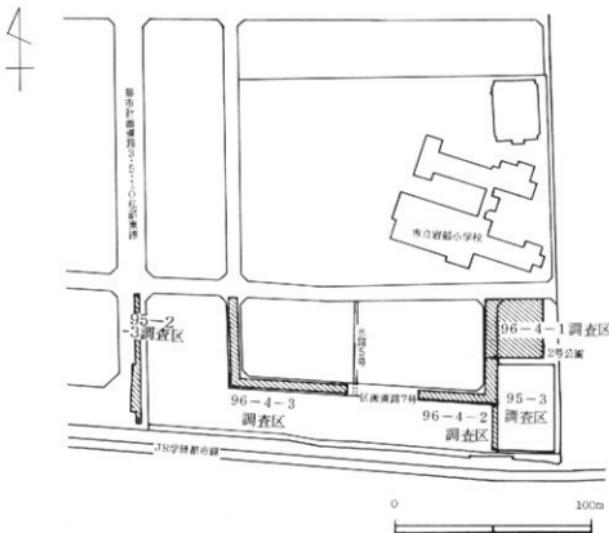


図2 調査地区

III 95-3・96-4-1調査区の基本層序

この両調査区は、南北に分割したものである故、地層の堆積の仕方も同様である。ただ、南北方向については、長距離にわたるため、土層の状況は地点により若干異なる場合もでてくる。そのため、総合的な観点から基本層序をとらえることにした。なお、他の調査区に関しては東西方向ではほぼ同一レベルの堆積状況を示すことから、別章で記述することにした。

さて、その層序であるが水田耕作を行う際に造成が行われているため各時代の遺構が同一面又は薄い包含層をはさんで重複しており、複雑である。よって比較的安定した北側断面をもとに16層に分層した。以下、各層位の時代及び性格について記述する。

近・現代層 第1層 表土は黒褐色砂質土層であり、近年まで水田耕作されていた。厚さ10~30cm程堆積している。

第2層 明褐色シルト質土層、小礫・大礫を含む。旧水田の床土にあたる。10~20cm程堆積する。

第3層 黄灰色シルト質土層、炭化物有り、土師器、瓦質土器片等を含んでいる。

中世層 第4層 暗灰色砂質土層。酸化鉄あり。遺物の混入あり。

第5層 5-1~3層 暗灰色、灰黄褐色の粘質シルト主体に構成される層。断面で遺構の確認できる部分もあるが、大きく削平されてしまっている。

古墳時代層 第6層 灰黄色砂層、ラミナの認められる層である。酸化鉄あり。

↓ 第7層 7-1~2層 灰白色粗砂を主体とする洪水堆積層。ラミナ明瞭。断面に自然河川が見られる。遺物、炭化物の混入。

第8層 黒色粘土層。層厚薄い。

第9層 9-1~3層 砂層を主体とする洪水層。後の10層、11層と前後するものほぼ同時期の形成と考えられる。

第10層 10-1~3層 灰色系の砂層を主体とする洪水堆積層。

第11層 11-1~3層 黒色系の砂層を主体とする層。ラミナ有り。

第12層 12-1~2層 黄灰色砂層。粗砂で、部分的に大礫が混入する。

第13層 13-1~2層 灰色系のシルト～粗砂のものが見られる。

第14層 14-1~7層 黒色から粗砂～細砂までを含む。酸化鉄有り。河川を構成する層で、交互にさまざまな層が堆積する。調査区東下端に位置し、さらにこの河川は深くなるため詳細については不明。

第15層 15-1~5層 黒色系粘土～シルト、酸化鉄あり。部分的に流水のあったことを示す砂層がみられるが、主に止水堆積。

第16層 16-1~2層 緑灰系粘土～シルト層。

以上が基本的な層序である。第6層までの比較的安定した土壤に比べ、下層においては河川の影響からか層は入り乱れている。また黒色の泥質土が見られることから低温で不安定な土地であったことが伺える。

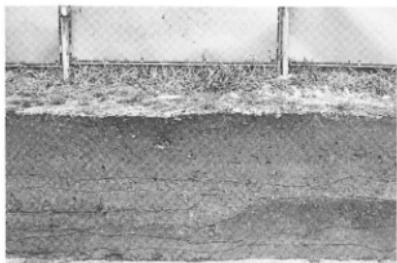


写真4 95-3調査区西側断面

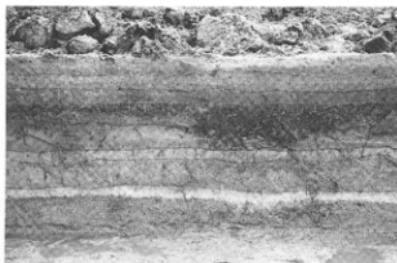
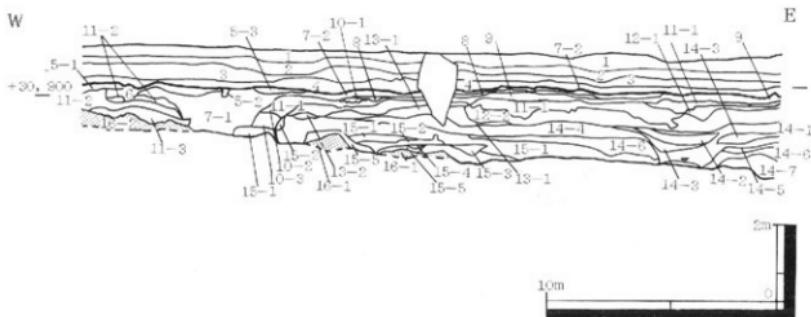


写真5 96-4-1調査区東側断面



IV 95-3 調査区の遺構と遺物

中世遺構面1

重機で耕作土を除去する作業中に新たに発見した遺構面である。調査地は、北に向かって低くなる3段からなる耕作田で、もともとの傾斜地を大きく階段状に削平することによって造られたものである。このため遺構の大部分が失われ、調査区の南端から約17.9m程北に向かった地点で東西に約20m、南北20mの範囲でのみ遺構を検出することができた。遺構は、中世の遺物を含む水田状遺構で、幅約(3.5~4.2)m×約(8.0~11.0)m、深さ約0.2m、長方形を呈する。この遺構の埋土は、明褐色シルトに褐色粘質土をブロック状に含んだもので、粗い白礫が多量に含まれていた。また底面は凹凸が激しく、人の足跡等も見られた。遺物は、須恵器、土師器、瓦器等の小片が若干出土したのみで、特筆すべきものはない。



写真6 水田状遺構検出状況

中世遺構面2

中世遺構面1の下、約60cm程土が堆積した後に現れる遺構面。調査区南側ではこの面を形成する段階で下層を削り込んでおり、同一の高さで検出した下層の遺構もあり、時期の差も区別のつかないことから、中世の遺構面としてこのような若干の差のある遺構もこの遺構面として扱う。これらの遺構は中世の耕作に伴うものである。古層と考えられる遺構には、縦横に走る多数の溝、畝溝状遺構がある。なかには、ほぼ幅35~40cm、深さ10~12cmの溝が数本集まって1単位を形成する鋤溝があり、東西方向では調査区の東端から西端までを貫く形で若干弧を描きながら4単位検出した。これに対し、南北方向の鋤溝は、調査区の東側及び中央西よりの部分の計2カ所のみである。断面の切合の関係から、東西方向の鋤溝の方が南北の鋤溝より先に造られたものであることが分かる。しかし検出した遺物を見る限り時期差は感じられない。なお中世遺構面2上層の遺物包含層内からは、土師器、須恵器、陶質土器、陶磁器、桃の種子などが多量に出土している。調査区中央付近では、幅約2m、深さ15cmの東西方向に真っ直ぐ走る2本の溝及び畝溝状遺構をそして調査区北側で幅約2.5mの同一方向の溝を検出した。これに続く時



写真7 鋤溝検出状況

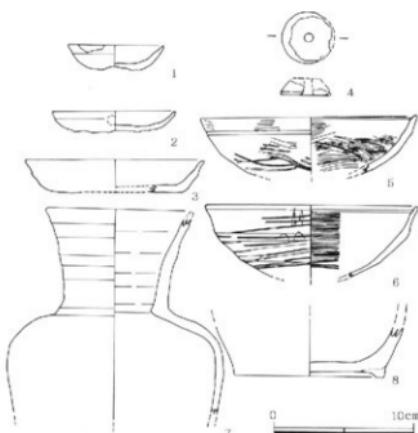


図4 出土遺物

期の遺構として、調査区南端中央西より部分で楕円形、播鉢型をした土坑を検出した。長径2.5、短径2.0m、深さ0.6mを測る。灌溉用の井戸の可能性がある。出土遺物には、土師皿、瓦器碗がある。(図4)(1)は、完形の土師皿。灯明皿として利用されたため内外面一部に煤が付着している。(5)(6)は、瓦器碗で内外面ともにヘラミガキ。内側に1条の沈線が巡る。なお、古墳時代遺構面で検出した河川内の土が堆積した後に流れている小河川として河川2がある。出土遺物はない。

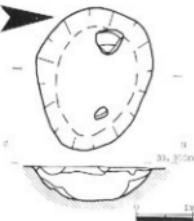


図5 土坑

古墳時代遺構面

河川を検出した遺構面で、基盤層は緑灰系のシルト～砂層である。河川は調査区中央部東端より西北方向に向かって流れている。最大幅23.5m、深さ約0.75m～1.05m、川の流れは幾度も変わったよう中州状の高まりが見られた。また、北端付近で二股に流れは分かれている。出土遺物としては(図8)がある。(1)は、壺底部で外面に黒斑、内面にハケ目が見られる。(2)は、丸底壺で、口縁部は少し内湾気味に立ち上がる。底部外面にヘラ削りの痕跡が見られる。(3)は、カメで、外面右上がりの叩き、内面ハケの工具痕が見られる。一方、この河川の南側、平坦部には不定形の土坑が数多く見られた。この土坑は周縁部を黒色粘土が、中央部を地山の土と同じようなオリーブ～緑灰色シルトが埋土となっている。凹地部分に溜まった池状の土坑から成り立った氾濫原と思われる。遺物は出土していない。



図6 中世遺構面2



図7 古墳時代遺構面



写真8 河川（東から）



写真9 河川（北から）



写真10 沼澤原



写真11 沼澤原土坑検出状況



写真12 遺物出土状況



写真13 出土遺物

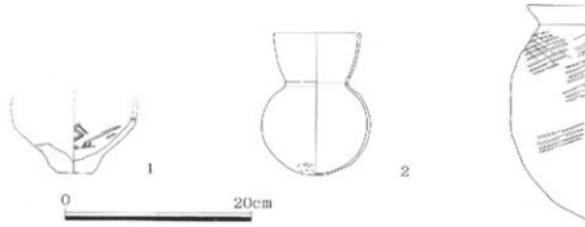


図8 出土遺物

V 96-4-1 調査区の遺構と遺物

弥生時代末～古墳時代遺構面

95-3調査区古墳時代遺構面に相当する。すでに上部の遺構面は、削平されてしまつており、最終遺構面のみの検出となつた。この面で検出された遺構としては、河川及びその氾濫原である。河川は2条流れしており、調査区西側河川を河川1、東側河川を河川2とする。河川1は、前年度発掘調査した折に検出した河川の下流域にあたり、調査区南端中央付近より北西に向かって流れている。川の最大幅11m、最深部1.30mであり、埋土には、白色砂粒が堆積していた。出土遺物も多く、細頸壺、高环、カメ、須恵器、木器等を検出した。（図10）（1）は、壺口縁部で口径16.6cm、口縁部の長さは7cmと長く、端部は内径した平面を有する。内外面とも横ナデ調整、にぶい黄褐色を呈する。（2）は、広口長頸壺の口縁部で、口径14.4cm、口縁部は外反し端部は平坦面をもつ。灰黄褐色を呈する。（3）は、壺上半部で、口径9.0cm、胴部最大径14.0cm。口縁部は、外面縦、内面横方向のヘラミガキ、体部外面へラミガキ、内面には多数の指頭圧痕がある。にぶい黄橙色を呈する。（4）は、細頸壺で口径8.9cm、胴部最大径12.9cmを測る。外面へラミガキ、頸部内面にハケ調整を施す。外面に黒斑が見られる。（5）は、木製えぶりで半月形、一部欠損しているが横幅25.5cm、縦9.2cm、中央上端近くに11.5cm×7.5cmの長方形の柄穴を穿っている。河川2は、調査区中央東端より北に向かって流れ、そこから西北へと蛇行する河川で、一方の川

岸が調査区外にあるため、川の規模を明確にすることはできないが、確認できる範囲での最大幅7m、最深部約2mを測る。黒色粘土が厚く堆積し、川底近くで白色の砂が見られるようになる。遺物は出土していない。河川1と2は、北側断面の層の堆積状況から河川1の方が新しい。またこの両河川に挟まれた部分から数多くの黒色粘土の堆積した不定形土坑を検出している。95年度調査区同様、河川の氾濫原であり、池状水溜まりの痕跡と考えられる。遺物は出土していない。

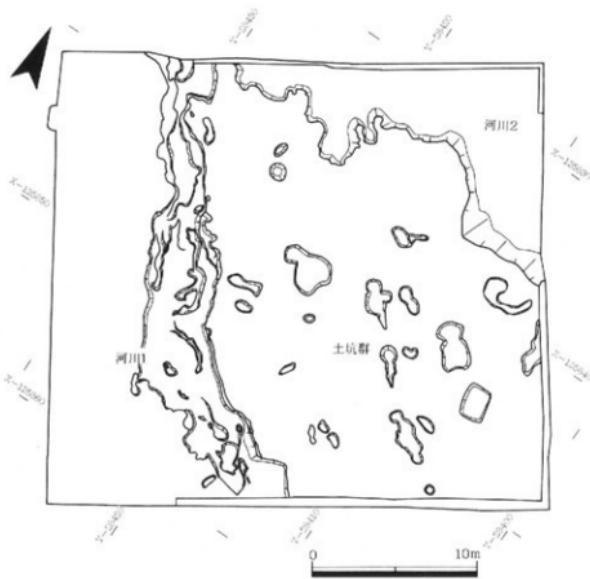


図9 弥生時代末～古墳時代遺構面



写真14 河川 1



写真15 河川 2



写真16 湿原



写真17 遺物出土状況

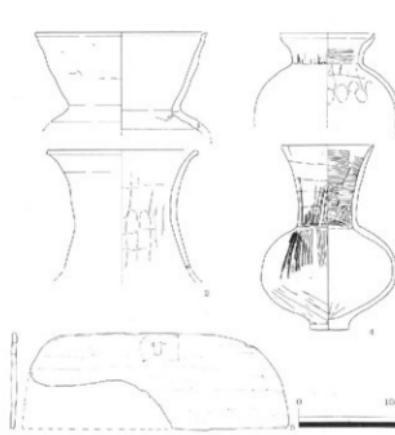


図10 出土遺物



写真18 出土遺物

VI 96-4-2・3 調査区の基本層序

東西方向に長く延びる調査区。最も下層の状況をよく把握できた96-4-3調査区の断面より基本層序を述べることとする。

近・現代層 第1層 表土は黒色砂質土層、水田耕作層であり、15~40cm程堆積している。

第2層 黄灰色シルト層。10cm程度の堆積。南方向に薄く消えていく。

近世層 第3層 緑灰色粘土層。

(中世層) (西側断面では北より5m程度の部分で5cm程の暗褐色のシルト質の層が見られた)

古墳時代層 第4層 黒色粘質~シルト層。断面で遺構の確認ができる。遺物の混入あり。

第5層 黄褐色~暗褐色系の粘質シルト、粘土層。炭化物の混入あり。

古墳時代層 第6層 黒褐色砂層。1cm程度の白礫を多く含む。ラミナ有り。以下洪水堆積層と
以前 考えられる。

第7層 黒褐色、暗褐色砂層。黄灰色粗砂が筋状に堆積する。

第8層 にぶい黄色シルト~粘土層。7層によって挟まれた層。ラミナ明瞭。

第9層 黄灰色砂層。

第10層 黒、オリーブ黒粘土層。

第11層 灰、黄灰色シルト層。

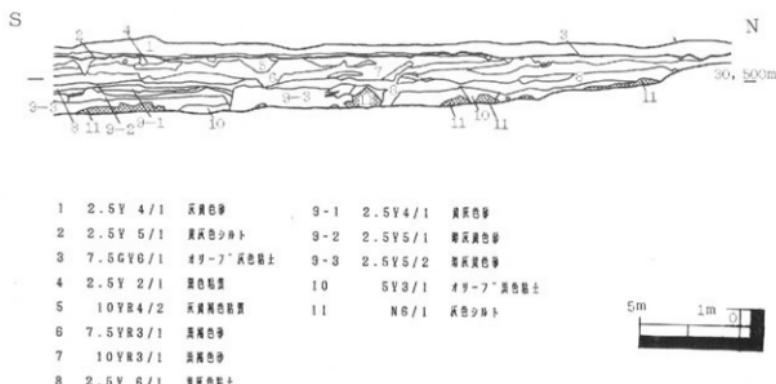


図11 96-4-2・3 調査区基本層序

VII 96-4-2 調査区の遺構と遺物

95-3調査区西側に隣接する、L字型に曲がった調査区である。東西方向（a）区、南北方向（b）区にわけて説明する。削平が甚だしく、層の堆積なしに各時代の遺構が検出される状況である。よって大まかな時代ごとに遺構面を分けることとした。

近現代～近世

(a) 区では、表土及び旧耕作土を重機によって除去した。この面は幾度も掘削及び搅乱され、層の堆積の仕方が一様でなく遺構の切り合い関係によって新旧を決めるより手だてがなかった。特に耕作時に造られた井戸および中央付近東西方向に土止め用の板棚を巡らすために打たれた杭列によってかなり掘削され、遺構内にみられる遺物も適切にその時代を反映している物とは考えがたい。なお井戸は調査区西端に円形素堀のものを1基、中央東より正方形素堀のものを検出している。円形のもののはうが新しい。さて近世の遺構としては、鋤溝がある。北側に少し弧を描きながら幅約30cm、深さ約20cmの溝を2本1単位として2カ所検出した。両鋤溝間は1m弱離れている。埋土は白色系の砂～シルトであり、遺物として土師器、須恵器、瓦器の破片等が出土した。いずれも図化に耐えうる物ではない。(b) 区では、遺構は検出していない。

中世遺構面

(a) 区では、東西方向に走る3条の溝状遺構を検出した。幅約25cm、深さ約10cmである。埋土は褐灰色粗砂混じりシルト。遺物には土師器・須恵器片等がある。さらに、中央より東側では敵溝と先の溝状遺構の続きを検出した。敵溝状遺構は幅80cm程の蒲鉾状のもので、すでに上部は削平されてしまっており、ところどころに敵溝が残存しているのみにすぎない。(b) 区においても、敵溝状遺構を検出している。95-3調査区で検出した第2遺構面の遺構と一致するものと考えられる。さらに敵溝状遺構を掘削すると先の溝状遺構の続きを検出した。よって、この溝状遺構は敵溝状遺構に先行する遺構である。いずれも中世の遺構と考えられる。



写真19 中世～近現代遺構検出

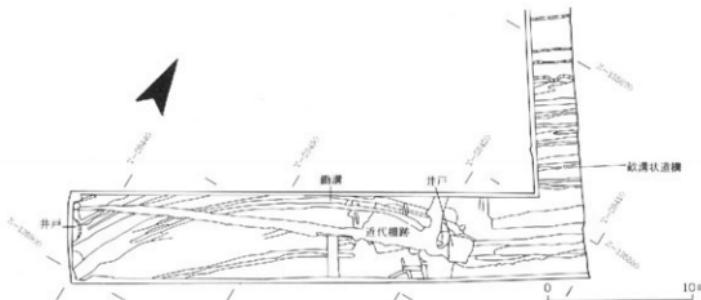


図12 中世～近現代遺構面

古墳時代遺構面

(a) 区では、自然流路、溝状遺構、建物跡を検出した。建物は、中央部付近で検出した掘立柱式建物で調査区外にさらに柱跡が続くため1間×2間以上、梁間約2mで東西方向に桁行をもつと推測される。柱根の残ったものもみられる。主な溝状遺構としては、東西方向に延びる2本と南北方向の2本を検出した。溝1は幅1m、深さ6cm、幅広の浅い溝で、埋土は黒色粘質土である。溝2は幅約20cm、深さ約10cm、溝3は、幅約60cm、深さ約35cm。溝4は幅約25cm、深さ約15cm、自然流路へ流れ込む形をとる。溝2から溝4はいずれも黒色粘土が堆積していた。おののの新旧関係は、建物の間を横切る格好で溝1が流れ、更に溝2・3と切り合っていくことから建物→溝1→溝2→溝3または溝4と続く。遺物としては土師器・須恵器を検出している。(b) 区では、遺構は検出しなかった。

*古墳時代以前について

95-3、96-4-1調査区の最終遺構面、基盤層が緑灰系のシルトとなる面である。重機により東西方向に1m×25m程のトレンチ掘削による層の確認をしたところ、古墳時代の遺構面から約1.2m程黄色または灰色系の礫・酸化鉄の多い砂層を掘削したところで、黒色粘土層となり、更に約40cm掘削したところで先の緑灰系のシルト層を検出した。この状況はトレンチ内を通してみられた。遺物の出土がなかったため、時期を特定できない。ただ西側96-4-3調査区の下層でも同様の堆積がみられることから先の遺構面が洪水堆積層の上に形成されたことが伺える。

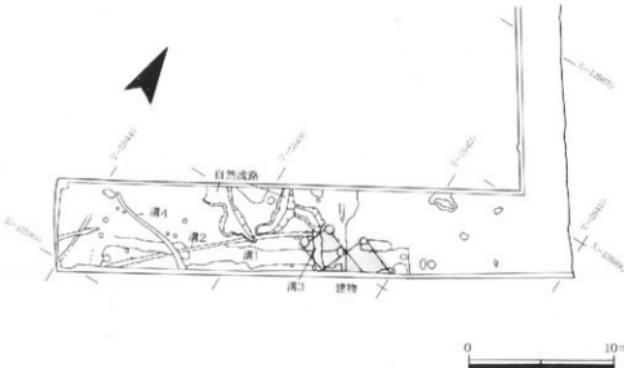


図13 古墳時代遺構面

VIII 96-4-3 調査区の遺構と遺物

水路5号西側の調査区で、L字型に曲がった調査区である。東西方向を(c)区、南北方向を(d)区とする。c・d区では様相が異なるため、分けて説明する。

(c) 区

中世遺構面

重機により表土及び旧耕作土を約30~40cm除去した段階で検出した遺構面で、上層部の整地により削平を受けている。また、中央付近では西側に1段低くなっている。この遺構面から検出した遺構には、鋤溝、河川、建物跡、井戸などがある。自然河川は、調査区東端で検出した川で、対岸は調査区外となるため規模は不明であるが、残存幅5m、深さ約1mを測る。この下層部は更に時代を遡る河川であり、現在東側に流れる水路5号の元の河川であったと考えられる。出土遺物としては、馬の歯、瓦器碗、瓦、須恵器、土師器等がある。上流域からの堆積によるもので時代的にはバラエティーに富んでいる。井戸はこの河川より7m程西の地点で検出した。掘形は1段目が2.8m×3.0mの長方形で、深さ20cm程掘削したもので、続く2段目が直径2.5m~3.0mの円形で深さ30~40cmの摺鉢状、そこから僅かに段をなして井戸底面まではほぼ真っ直ぐに約35cm程掘削してあった。底面から10cm程高くなった部分で、直径約40cm、高さ約10cmの木製の曲物を3段積み重ねた井筒を検出した。特に下2段は1枚の板材に深く切り込みを入れ2段に見せかけた上下の繋がった曲物であった。1カ所を樹皮で縫合させている。ただ井戸中に流入した土砂の圧力により遺存状態はあまり良好とはいえず、図化に耐えられる物ではなかった。更に曲物の上には長さ40cm、厚さ5cmの木片が横たわっていた。曲物上に木枠のあった可能性も考えられる。井戸内からの出土遺物ではなく、1段目掘形部分より井戸埋没後ごみ捨て場として利用された際に土師器、瓦質土器の破片、人頭大の石などが無造作に投げ込まれた状態で出土した。東端より約20mの地点では建物跡を検出した。1間×2間もしくは1間×3間の東西方向に桁行をもつ掘立柱式建物で、柱穴の中には柱根の残るものもあった。特筆すべきものとしては建物の周囲には30基程のピットがあり、この建物との関係が注目される。ピット24は、東西84cm、南北32cm、深さ約10cmで意識的に中央2列に3cm~15cm大の青・白の河原石を11個敷き並べ、そのまわりの花崗岩製の石と合わせて合計20個程置いていた。そして、この石の上に馬の下顎が正位で置かれ

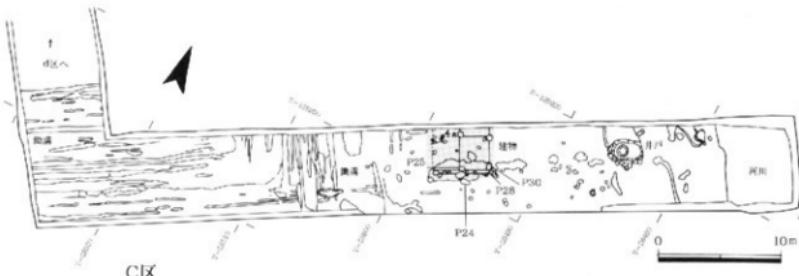


図14 中世遺構面

ていた。馬の頭骨のみをこの石の上に置いていた可能性があり、この集石遺構はまじない的要素をもつたものであったことが考えられる。ピット28は、40cm×30cm、深さ33cm。瓦器碗が2個体分出土した。完形でないことから投棄したものと考えられる。

ピット25は、33cm×23cm、深さ17cm。同じく瓦器碗が出土した。

中央より西側の1段低くなった部分からは、多数の鋤溝を検出した。東西方向の鋤溝がほとんどであったが、中央付近でのみ南北方向に走る鋤溝がみられた。東西方向の鋤溝は、幅30cm～50cm、深さ約20cmの溝が4本集まった幅2.5mのものとこれとは独立した形の溝数本を検出した。両溝の切合い関係から南北方向の溝の方が新しいことがわかるが、出土遺物を見る限りにおいては時期差は感じられない。

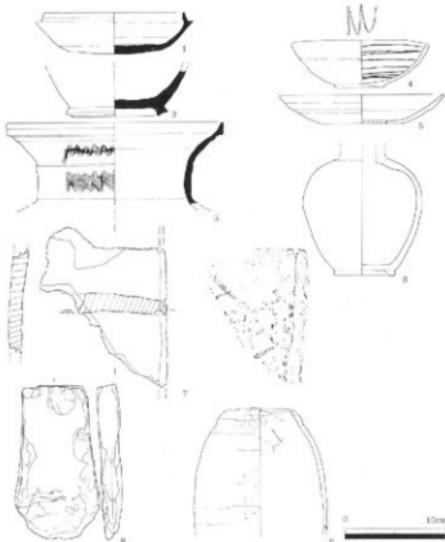


図15 河川内出土遺物



写真20 井戸検出状況



写真21 井戸完掘状況

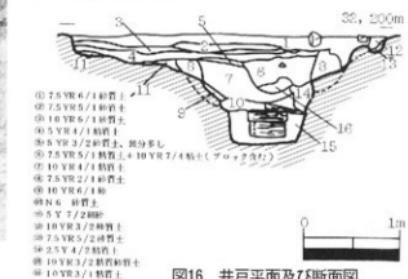
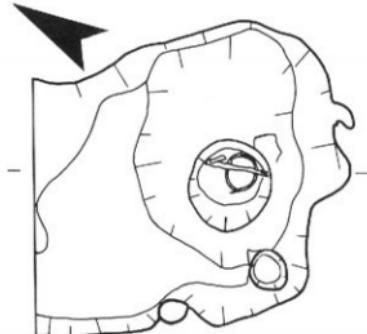


図16 井戸平面及び断面図



写真22 馬の歯



写真23 集石造構

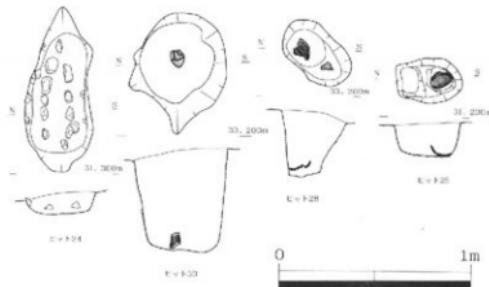


図17 ピット群平面及び断面図

古墳時代遺構面

中世遺構面と同一レベルで検出した遺構面である。主に埋土は黒褐色～褐色の粘質土であり、基盤となる層はにぶい黄褐色シルト～砂層である。検出した遺構は河川、建物跡、土坑、溝等である。河川は、第1遺構面下層部にあたり、同じく北に向かって流れている。深さ約40～50cm、川底付近では幅1.2m、深さ30cmの段になっていた。出土遺物として須恵器、土師器等がある。いずれも小片であり、図化に耐えない。建物跡としては掘立柱式建物3棟を検出した。北東の建物（図18-1）は北側断面に柱穴がちょうどかかったもので1間×2間以上の規模をもつ。中央部の建物（図18-2）はちょうど段差をまたぐような格好で検出した。2間×2間の縦柱建物で、南北方向に桁行をもつ。出土遺物に土師器・須恵器の破片がある。西北部で検出した建物（図18-3）は2間×2間、東西方向に桁行をもつ。柱穴のうち柱根の残るもののが2基出土した。土坑1は、中央付近より検出した。平面は楕円形を呈し、底部は鉢鉢状である。埋土は土坑周縁部で黒色粘土、中央部でオリーブ褐色砂の堆積した大きな土坑であるが遺構の性格は不明である。

周溝1・周溝2は、北側に円弧を描く溝で、調査区外南側にさらに続く可能性がある。周溝1は、内側の溝で半円形、幅約50cm、深さ約30cmを測る。一部中世の井戸によって削りとられてしまっている。周溝2は、円周の1/3程の長さの溝で幅30～50cm、深さ約20cmを測る。これらの溝の内側平坦部には数個のピットがみられることから建物の周溝として機能していたことが考えられる。溝1は、中世井戸に分断された東西に流れる溝で、幅40～50cm、深さ約30cm、内部より須恵器の壺（図20-17）出土した。溝3は、東西方向に真っ直ぐ走る溝で幅約30～40cm、深さ約15cmを測る。同様の溝が溝4・5・6・7で、特に溝6を除くこれらの溝は約2.5mの等間隔の幅で流れている。溝2は幅70～80cm、深さ10～20cm、土坑1より西南隅へと流れる溝で第1遺構面の溝群によって掘削をうけている。この溝に流れ込むかのように溝10・11・12・13が南北方向に流れている。更にこれらの溝より新しく溝8、また溝9が流れている。溝9は西隅の掘立柱建物3廃絶後られた溝である（図22参照）。出土遺物として土師器・須恵器（図20-11～18）がある。

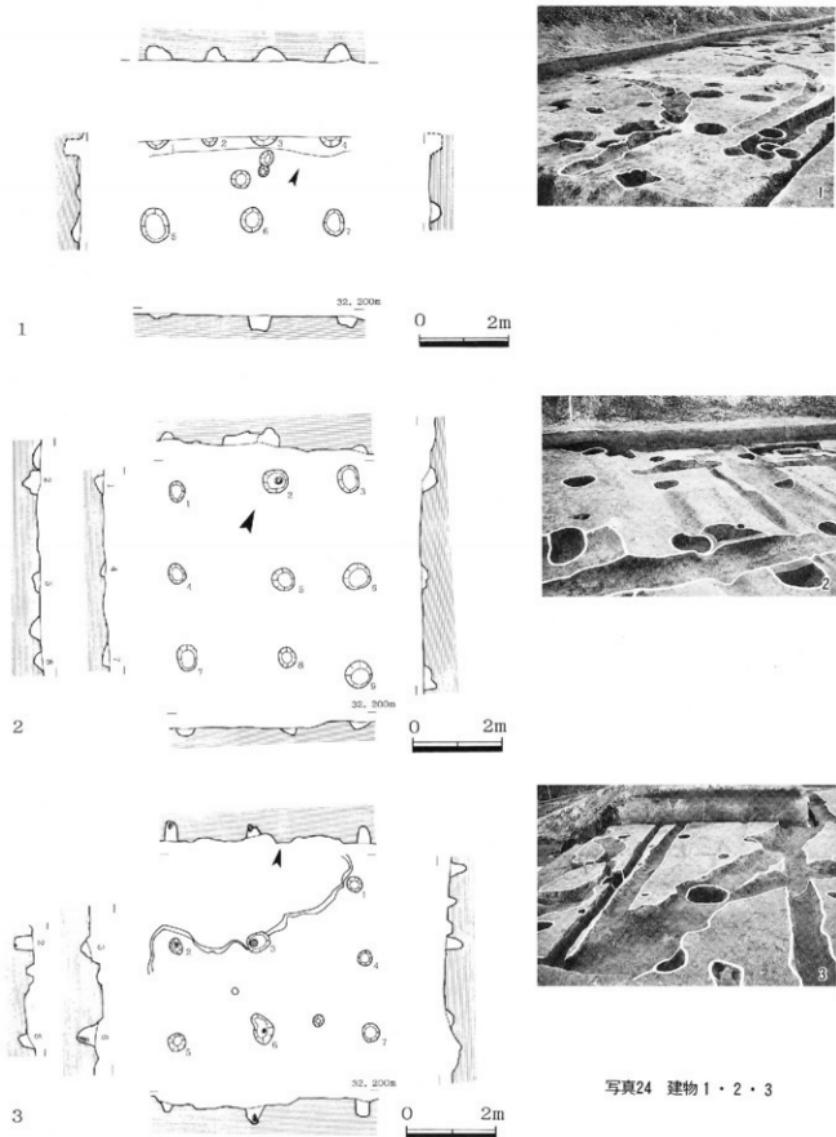


写真24 建物1・2・3

図18 建物1・2・3

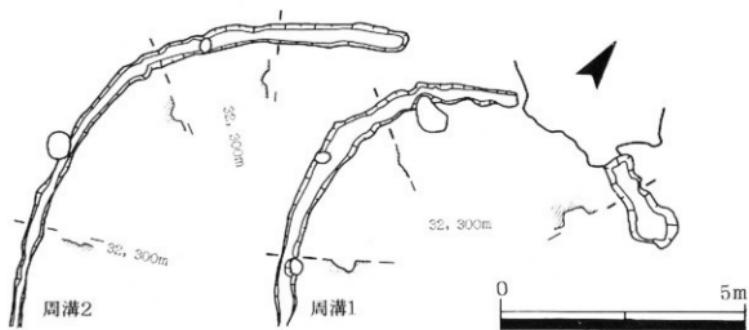


図19 周溝平面及び断面図

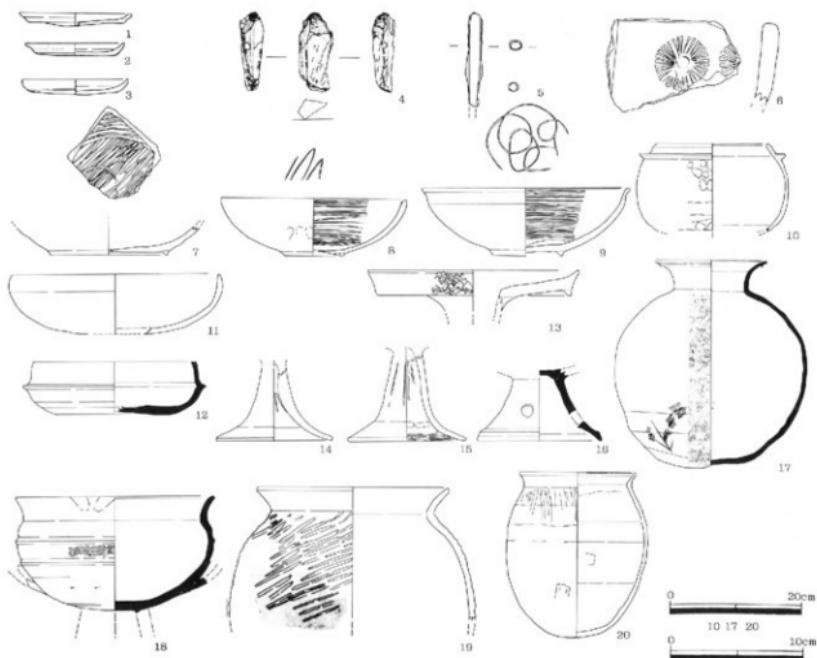


図20 出土遺物

*古墳時代以前の遺構

古墳時代遺構面の下約1.2~1.5mで自然河川を検出した。その間洪水堆積層があり、遺物は検出しなかった。

(d) 区

南北方向の調査区で、(c)区より1段低い部分である。96-4-1調査区同様、傾斜地を大きく段状に削り取ったため遺構面の大半が失われてしまっている。そのため、中世・古墳時代遺構面を調査区北よりの断面で確認した以外は、下層に洪水堆積層が続くため、トレンチ掘りによって(c)区古墳時代以前の遺構に繋がる河川の一部を検出したに過ぎない。なお、この洪水堆積層の中から縄文時代中期~後期の石器を検出した。

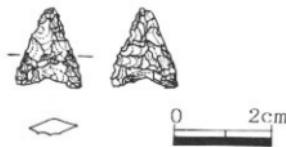


図21 出土石器

IX　まとめ

今回の調査では、各時代における土地活用の仕方について比較的良好な資料を得ることが出来た。本章でこのことについて簡単に触れておきたい。

近世における水田耕作

今回の調査では弥生時代末～古墳時代、中世、近世～現代に至るまでの人々が3時期の土地活用が考えられる。現在の地形を見てみると、付近の田は南北方向にきれいに区画されそれぞれに小字名がつけられている。95-3・96-4-1調査区には「宝田」という名がつけられ、また南北に走る水路5号の筋を地蔵筋と呼んでいる。

段々状の田になったのは調査結果から近世以降と考えられるが、この地でこのような水田耕作が行われる理由の一つとして、豊富な水量が挙げられる。市史『自然編I』によると「森、私市の池 私市にはため池がほとんどなく、森に集中する。森の場合、小久保川沿いと森の東北側の谷に集まる。いずれも湧水の豊富な場所である。堂池と大知池とが本格的なため池である。(P178)」「森新池 ・・・ 国鉄片町線(JR学研都市線)河内磐船駅の方へ段々状の田へ供給される水路は農協磐船支店の横を通って権田筋を下っていく。森へせり出した尾根の先端部のとぎれた所に堤防で囲って棚田状の水の便の悪い田への供給に役立てている。(P180)」

中世における水田耕作

中世にさかのぼると(1) 小規模ながら規格性をもった水田状造構と(2) 北西方向に弧を描く鋪溝造構を検出している。(1)と(2)両造構面のあいだにはかなりの土砂が堆積しており時間の流れが考えられる。が、遺物を見る限りにおいてはその差はあまり感じられなかった。これらの時期になると、95-3、96-4-1調査区部分の河川も流れを変えたためか氾濫のない、比較的安定した土地として耕作を行うに適した土地となったようである。水田耕作のみならず、畝溝状造構の検出から畑作耕作の行われていたことも新たにわかったことである。また96-4-3調査区では、これら農耕に関する遺構の他、中世におけるものとして井戸・建物跡も検出しており土地利用の様子が広がったことが伺える。なお、(1)の水田状造構については出土例、性格など今後の検討課題としたい。

古墳時代における土地活用

さらに古墳時代にさかのぼると95-3、96-4-1調査区は、この周辺地域では最も低い場所であり、河川が流れ、付近は低湿地として荒れ果てていた様子が伺える。これまでの数次にわたる調査結果から人々の居住空間、鍛冶工人達の工房等は今述べた調査区の東側の大きな河川と京阪電鉄交野線付近に流动していた河川にはさまれた扇状地形の割合平坦な部分に営まれたと考えられる。

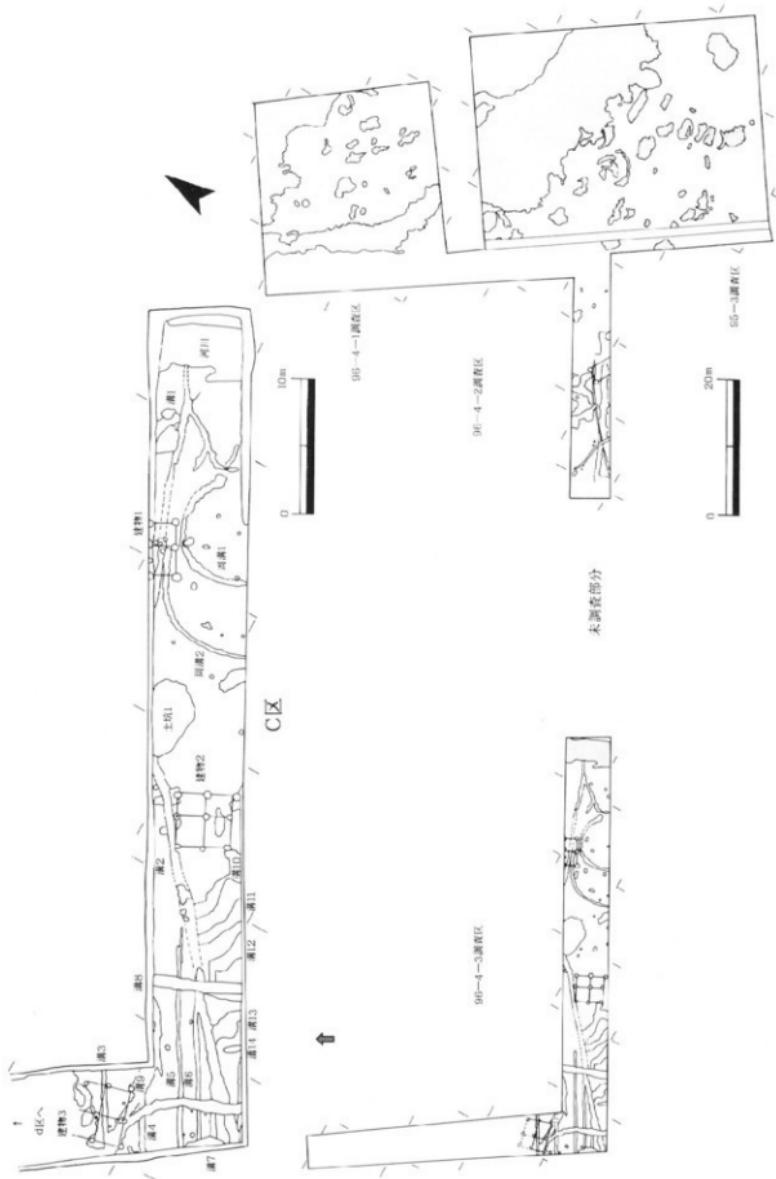


図22 古墳時代全体図

報告書抄録

ふりがな	もりいせき						
書名	森遺跡VI						
副書名	河内磐船駅北土地区画整理事業文化財調査工事に伴う発掘調査						
巻次							
シリーズ名	交野市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	1996-Ⅲ						
編著者名	小川暢子						
編集機関	交野市教育委員会						
所在地	〒576 大阪府交野市私部1丁目1番1号 ☎(0720) 92-0121						
発行年月日	西暦1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
森	紹和 交野市 紹和 森北	27230	34° 46' 26"	136° 41' 20"	1995年12月 ~1996年3月 1996年7月 ~12月	1,449 1,826	区画整理事業 区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
森	集落跡 生産遺跡	弥生時代末~ 古墳時代 中世	溝・上坑・掘立柱式 建物・河川 溝・鍬溝・掘立柱式 建物・井戸・河川	弥生土器・鉄器・ 土師器・須恵器・ 木器・石製品 土師器・瓦器・陶 磁器			

交野市埋蔵文化財調査報告 1996-Ⅲ

森 遺 跡 VI

—— 95-3・96-4-1, 2, 3調査区の概要 ——

発 行 日 1997. 3

編集・発行 交野市教育委員会

印 刷 株式会社さきょうせい
